

[論文]

## サヴァ・ムルカリの表記システムにおける二重字

西原 周子

### 1. はじめに

現代セルビア標準語の正書法は一音と一字を対応させる原則に基づいており、例外はあるもののヨハン・クリストフ・アーデルング<sup>1</sup>の言葉のように「書いてあるとおりに読む」仕組みになっている。19世紀セルビアの言語学者・文学者・民俗学者ヴァーク・カラジッチ<sup>2</sup>は、民衆セルビア語の文字の近代化を行い、この正書法の原形を完成させた人物として知られているが、カラジッチは文字の改革においてサヴァ・ムルカリによる表記法を参考にした。そこで本論文では、サヴァ・ムルカリが『厚いイエルの脂肪もしくは文字の選別』（1810年）で提唱した表記システムが、どのようにカラジッチによる正書法へと繋がっていったかを明らかにし、キリル文字表記法の変遷とセルビア知識人同士の繋がりについて考察する。

なお、セルビア語の表記法の歴史を全体的に見た場合、ラテン文字による表記法の歴史も重要な位置を占めているが<sup>3</sup>、本研究で扱うサヴァ・ムルカリは、セルビア語のラテン文字表記の改革に重要な役割は果たしていないため、ここでは研究対象をキリル文字に限定し、ラテン文字については本論文では扱わないことにする。

ムルカリによる正書法改革については、オパチッチ-レキッチの *Сава Мркаљ: живот и дјело* (Novi Sad, 1978)、ゴイコ・ニコリシュの *Сава Мркаљ: повијест о једном страдалнику* (Zagreb, 1980)、ミラン・モグシュとヨシップ・ヴォンチナの “*Salo debeloga jera libo azbukoprotres*” *Save Mrkalja* (Zagreb, 1983) 等、様々な研究が行われている。その中でも本論文では先行研究として、最新かつ最も充実しているミロシュ・オクカのスヴァ・ムルカリ研究を参照する。オクカの “*Сало дебелого јера либо азбукопротрес*” *Саве Мркаља у старом и новом руху* では、『厚いイエルの脂肪』の内容が詳細に分析された結果、セルビア語の正書法に対するムルカリの貢献が高く評価されている。しかし筆者の考えでは、文字 ъ を含む二重字と文字 ѣ をめぐり、ムルカリによる表記システムの合理性、および不完全さと限界について議論の余地が残されている。

そこで、ムルカリがどのような理論に基づいて当時の教会の文字を選別し、アルファベットを整備したのかを追った上で、そのシステムの不完全さについて考察を加える。そしてカラジッチがムルカリによる表記法から受けた大きな影響について述べること

で、その不完全さは何によって解消され得たのかを論じようとするものである。

## 2. ムルカリの略歴

サヴァ・ムルカリは1783年に、軍政国境地帯<sup>4</sup>の第4（スルーニ）連隊区と第5（グリーンナ）連隊区の北部の境界に位置する村シェニチャク（現クロアチア領コルドウン地方）で生まれた。ムルカリの教育はまず軍政クロアチア第3（オグリン）連隊区に位置する村ブラシュキの学校で始まった。そして第1（リカ）連隊区の町ゴスピッチで教師として働いた後、ザグレブやブダで哲学、天文学、数学、詩、多言語<sup>5</sup>の高等教育を受け、学位を取得した。

ブダとペシュトには当時セルビア人コミュニティが存在した。またヨヴァン・ムシュカティロヴィッチ<sup>6</sup>、サヴァ・テケリヤ<sup>7</sup>、ルキヤン・ムシツキ<sup>8</sup>、ステファン・ストラティミロヴィッチ<sup>9</sup>、ゲオルギエ・フラニスラヴ<sup>10</sup>、ヨシフ・プトニク<sup>11</sup>、イヴァン・サヴィッチ・ユーゴヴィッチ<sup>12</sup>らがこの都市で学んでいた。さらに1810年頃、関節炎の療養のためハンガリーに滞在していたカラジッチとも知り合った。

1810年にハンガリーの正教徒民族学校の総監となったウロシュ・ネストロヴィッチ（1765-1825）は、学校と教会の関係をめぐり主教ストラティミロヴィッチと対立していた。ロクサンディチは年齢と社会的身分の差ゆえにネストロヴィッチとムルカリが接点を持つことは難しかっただろうとしつつ、二人が交流した可能性に言及している<sup>13</sup>。ムルカリの階級意識に関して言えば、ムルカリは高等教育を主にカトリック圏で受けていたものの、ロクサンディチによる評価では「農民社会の知的代表」<sup>14</sup>であった。ロクサンディチはさらにイェルネイ・コピタル<sup>15</sup>やドイツ・ロシアの知識人の支援を得ていたカラジッチと比較し、クロアチアのセルビア人社会で生まれたムルカリはそのような後ろ盾を持っていなかったとしている<sup>16</sup>。

ムルカリは「キリル・ジヴコヴィッチへの頌歌」（1805年）など詩作も行ったが、文学的に特筆すべき評価を受けている詩はない<sup>17</sup>。彼の最も有名な著作は『厚いイェルの脂肪もしくは文字の選別』（1810年）である。この論文によって彼はセルビア民衆語に基づく新たな正書法を提案し、セルビア語にとっての「脂肪」、もしくは贅肉であるところの「厚いイェル (ѣ)」の排除を主張した。

しかし文字ѣの排除に関して主に正教会指導層から激しい批判を受けた結果、1817年に『セルビア新聞』上で発表した「撤回もしくは厚いイェルの弁護」では、文字ѣを排除すべきだという自らの意見を否定した。ただし本論文では、この「撤回」の内容に踏み込まない。というのも、筆者の意見では『厚いイェルの脂肪』にさほどの政治的意図が関係せず、文字ѣの排除は言語学的見解から主張されたものだと考えられる一方、「撤回」は正教会からの批判を和らげる意図によるもので、ムルカリの言語的な見地とは無関係だったためである。

しかしながら、ムルカリへの攻撃の手はさして緩まなかったようである。ムルカリは 1811 年に一度故郷の軍政国境地帯に戻りゴミリエ修道院に滞在したが、その後ダルマチアの枢機卿会議に雇われシベニクへ向かった<sup>18</sup>。1825 年頃から体調を崩し、1828 年にゴミリエ修道院で療養した後、1833 年にウィーンの治療院で死去した。

### 3. 18 世紀セルビアのキリル文字の使用状況

ムルカリが提唱した表記システムについて述べる前に、ムルカリが文字改革の必要性を感じたのはどのような状況においてのことだったか、当時のセルビア人による文芸活動で使用されていた文字を確認する。

#### 3.1. キリル文字の成り立ち

キリル文字はグラゴール文字とギリシア文字を起源に持ち、「グラゴール文字体系のギリシア化」<sup>19</sup>によってできた文字である。モラヴィアへの伝道のため派遣されたキュロスとメトディオス兄弟は、詩篇、福音書やアポストル<sup>20</sup>を彼ら自身の制定した文語、すなわち古代教会スラヴ語に翻訳し、同じく考案した文字によって記した。このアルファベットは今日グラゴール文字として知られており、約 40 文字で構成されている。各文字は、ギリシア語よりも豊富だった当時のスラヴ語の音韻パターンに対応していた。グラゴール文字は 9 世紀から 11 世紀にかけてモラヴィアからバルカンにわたる広い地域において、東方教会のスラヴ人に用いられた<sup>21</sup>が、間もなく後にキリル文字と呼ばれることになる文字によって取って代わられた。

キリル文字は当時のギリシア語のアンシアル書体のアルファベットとして誕生した。キリル文字の創作者については、プレスラフのコンスタンティン<sup>22</sup>に代表されるキュロスとメトディオス兄弟の弟子たちがアンシアル書体を発明し、キュロスを記念して名付けたという説<sup>23</sup>があるものの定かではない。

古代教会スラヴ語のキリル文字は 40 文字で構成されており、合字の ѡ と二重字の ѡи を除いて 38 文字と数えられることもある<sup>24</sup>。そのうち以下の 26 文字はギリシア文字由来である<sup>25</sup>。

а, в, г, д, е, з, з, и, і, к, л, м, н, о, п, р, с, т, оу, ф, х, w, љ, џ, ѡ, ѡи.

これらの文字はそれぞれギリシア文字 Α, Β, Γ, Δ, Ε, Ζ (小文字 ζ), Ζ, Η<sup>26</sup>, Ι, Κ, Λ, Μ, Ν, Ο, Π, Ρ, Σ, 複母音 ου, Φ, Χ, Ω (小文字 ω), Ξ (小文字 ξ), Ψ, Θ, Υ<sup>27</sup> に対応する。その上でギリシア語には存在しないスラヴ語の音素が、以下の 14 (または 12) の文字によって補われている。それらの文字は同じ音を表すグラゴール文字と形が似ている。

б, ж, ѣ, ц, ч, ш, (щ), ѣ, ѣ, (ѣи), ѣ, ю, ж, а.

さらに 10 世紀からの手稿には、2 文字を 1 文字に統合した以下のような合字が見られた。

Ю, **Ѧ**, ІЖ, ІА, ОУ, (Ш).

その他、一文字として扱われる二重字としては以下の文字が挙げられる。

оу, ы, (ѡи).

これらのキリル文字の使用は、セルビアにおいて12世紀から完全に支配的になった<sup>28</sup>。その後伝統的なセルビア教会スラヴ語が唯一の文語であった時代が続いたが、18世紀になるとセルビアの文芸活動における文語の主流は、ロシア教会スラヴ語とロシア文語を模倣した文語に移り変わった。それに伴い、グラゴール文字から転写されたキリル文字、古代教会スラヴ語のキリル文字、セルビア教会スラヴ語のキリル文字に加え、18世紀前半に導入されたロシア教会スラヴ語の文字と世俗文字が存在することになった。さらに1760年代にはオルフェリンによる民衆語の詩作品群が登場したが、民衆語を表記する方法はまだ整備されていなかった。ムルカリの『厚いイェルの脂肪』が書かれた1810年までに、セルビア文字文化では以下の3種類のキリル文字が用いられていたとオクカは述べている<sup>29</sup>。

①グラゴール文字の体系に基づき翻字されたキリル文字

а, б, в, г, д, е, ж, ѕ, з, и, і, ѣ, к, л, м, н, о, п, р, с, т, оу, ф, х, (w, п'), ц, ч, ш, щ, ъ, ь, ѣ, (**Ѧ**), ІЖ, ю, а.

②古代教会スラヴ語のキリル文字（当時は数字が存在しなかったため、一文字ごとに数の意味を付与されている）

а, б, в, г, д, е, ж, ѕ, з, и, ѳ, і, к, л, м, н, љ, о, п, (G), р, с, т, оу, ф, х, ѱ, w, (**Ѧ**), ц, ч, ш, щ, ъ, ы, ь, ѣ, **Ѧ**, ю, а, ІА, ж, ІЖ, (V).

③セルビア教会スラヴ語のキリル文字（数価は持たない）

а, б, в, г, д, е, ж, з, и, і, к, л, м, н, о, п, р, с, т, оу, ф, х, w, ц, ч, ш, щ, ь, ы, ѣ, **Ѧ**, ю, ю, (ѳ, љ, ѱ, V).

### 3.2. ロシアからの影響

オクカ<sup>30</sup>とミラノヴィッチ<sup>31</sup>は共に、セルビア教会スラヴ語の文字とロシア教会スラヴ語の文字の相違の例として次の二作品からアルファベットを抽出している。第一に、キプリヤン・ラチャニン<sup>32</sup>の『初等教育読本』（1717年）におけるセルビア教会スラヴ語のキリル文字は以下のとおりである。

а, б, в, г, д, е, е, ж, ѕ, з, и, і, к, л, м, н, о, п, р, с, т, оу, оу, ѳ, х, ъ, ѡ, w, ф, ѱ, ц, ч, ш, щ, ѣ, **Ѧ**, ю, ю, љ, ѣ, ѱ, ы, V.

特筆すべき点は、有声後部歯茎破擦音を表す文字 **Ѧ** が用いられていることである。ムルカリの表記システムを論じる際、18世紀初めのテキストで文字 **Ѧ** が既に使用されているという事実は重要である。ラチャニンだけでなくガヴリロ・ヴェンツロヴィッチ<sup>33</sup>のテキストにも文字 **Ѧ** は見られる。

オーストリア政府は1770年にヨーゼフ・クルツベック<sup>34</sup>に独占印刷権を与える以前の時代に、領内におけるセルビア語の本の発行を許可していなかった。そこでセルビア正教会の必要とする教会の本がロシアからしばしば秘密の経路を通じて輸入され、その結果ロシアで用いられていた教会スラヴ語がもたらされた。1726年にセルビアに到着したマクシム・スヴォロフ<sup>35</sup>や、1730年代に来訪したエマヌイル・コザチンスキ<sup>36</sup>の率いる教師集団によるロシア教会スラヴ語の教育と文芸活動も、若い知識人たちをロシア志向に仕立て上げた。その結果、1740年代以降、ロシア教会スラヴ語と18世紀のロシア文語を模した文語が、当時のセルビアにおける文芸活動の主流となった。それら二つの文語で用いられたアルファベットには、典礼書の教会スラヴ語の文字と1708年にピョートル1世が広めた世俗文字との2種類が存在した。したがってそれらの文語を模したセルビアの文芸活動では、内容の宗教性・世俗性に応じて言語と文字が変化し、一貫しない表記によって文字をめぐる混乱は悪化した。

例えば、ロシア教会スラヴ語とセルビア教会スラヴ語の音韻の違いから、文字と音の対応が異なる場合があった。文字 **а** はセルビア教会スラヴ語のアルファベットには存在しないが、ロシア教会スラヴ語では音 /ja/ を表した。文字 **ш** はセルビア教会スラヴ語で音 **шт**、ロシア教会スラヴ語で音 **шч** を持っていた。セルビアでギリシア語の単語のみに使われていた文字 **Ѡ** は、ロシア教会スラヴ語では文字 **Ѡ** と同じ音を記す文字だった。

さらに、薄いイェル (**ѡ**) と厚いイェル (**Ѣ**) は、当時のロシア語とセルビア語において音価を持たなかったにもかかわらず、装飾的に使用されていた。セルビアの正教会指導層はとりわけ文字 **Ѣ** を、ロシアとの繋がりを重視する政治的姿勢を示すものとして重んじた。この傾向は上述のように、後に『厚いイェルの脂肪』でムルカリが文字 **Ѣ** の排除を主張した際、正教会からの攻撃を招くことになる。

### 3.3. セルビア文語と文字 **Ѡ** の使用

これらのロシア教会スラヴ語とスラヴ化されたロシア語の優勢は、1780年代になるとセルビア口語の使用によって脅かされ始めた。オルフェリンの著作の中にも、セルビア語を基盤とした言語で書かれた作品は存在する。ワイン生産のガイドブック『経験豊富なワイン職人』(1783年)<sup>37</sup>がそうである。この手引き書では次のような文字が使用されている。

а, б, в, г, д, е, ж, с, з, и, і, ї, к, л, м, н, о, п, р, с, т, Ѡ, оу, у, ф, х, ѡ, ц, ч, ш, щ, ѣ, ы, ѥ, Ѣ, є, ю, w, Ѧ, ѧ, Ѩ, ѩ, Ѫ, ѫ, Ѭ, ѭ, Ѯ, ѯ, Ѱ, ѱ, Ѳ, ѳ, Ѵ, ѵ.

ここで文字 **Ѡ** が用いられていることを指摘しておきたい。出版年としては『経験豊富なワイン職人』よりも前にあたるラーイッチ<sup>38</sup>の『カテキズム』(1774年)でも文字 **Ѡ** が使われている。『カテキズム』は教会スラヴ語のタイトルを持つものの、内容

はかなり民衆語的である。これはオーストリア政府が1770年から民衆語でのカテキズムを要求したためである。この作品のブダで刊行された1845年版<sup>39</sup>には、以下の文字が用いられている。

а, б, в, г, д, е, ж, з, и, ї, й, к, л, м, н, о, п, р, с, т, ѣ, оу, у, х, ѿ, ц, ч, ш, щ, ъ, ы, ь, ѣ, е, ю, ѡ, ѧ, Ѩ, ѩ, Ѫ, ѫ, Ѭ, ѭ, Ѯ, ѯ, Ѱ, ѱ, Ѳ, ѳ, Ѵ, ѵ.

同じくラーイッチの詩『竜の鷲たちとの戦い』（1791年）<sup>40</sup>でも文字 *h* が用いられている。

а, б, в, г, д, е, ж, з, и, ї, й, к, л, м, н, о, п, р, с, т, ѣ, оу, у, ф, х, ѿ, ц, ч, ш, щ, ъ, ы, ь, ѣ, е, ю, ѡ, ѧ, Ѩ, ѩ, Ѫ, ѫ, Ѭ, ѭ, Ѯ, ѯ, Ѱ, ѱ, Ѳ, ѳ, Ѵ, ѵ.

ドシテイ・オブラドヴィッチ<sup>41</sup>の作品でも、文字 *h* は使われている。『ハラランピイエの手紙』（1783年）<sup>42</sup>の文字を見てみよう。

а, б, в, г, д, е, ж, з, и, ї, й, к, л, м, н, о, п, р, с, т, ѣ, у, ф, х, ц, ч, ш, щ, ъ, ы, ь, ѣ, э, ю, я, Ѳ.

ただしこの作品で、作家の署名は Обрадовичь になっている。セルビア人の姓で *h* のかわりに *ч* を用いるのはロシア教会スラヴ語的な特徴である<sup>43</sup>。

文字 *h* の使用は『オブラドヴィッチの人生と冒険』（1783年）<sup>44</sup>でも同様である。

а, б, в, г, д, е, ж, з, и, ї, й, к, л, м, н, о, п, р, с, т, ѣ, у, ф, х, ц, ч, ш, щ, ъ, ы, ь, ѣ, э, ю, я, Ѳ, ѵ.

この『オブラドヴィッチの人生と冒険』が全集へ再録された際（1833年）<sup>45</sup>の文字との比較も興味深い。アルファベットには多少変更が加えられ、書体は近代的な印象に変容している。

а, б, в, г, д, е, ж, ѣ, з, и, ї, й, к, л, м, н, о, п, р, с, т, ѣ, у, ф, х, ц, ч, ш, щ, ъ, ы, ь, ѣ, е, ю, я, Ѳ, ѵ.

主な変更としては、文字 *ы* の追加、文字 *щ* の不使用、そして文字 *h* の追加がある。逆に言えば、オリジナル版には文字 *h* と *ḥ* の区別がない。例えば1833年版の за леђа мећемо<sup>46</sup> は、1783年版で залеђа мећемо<sup>47</sup> となっている。より正確に言うならば、文字 *h* はグラゴール文字 **М** からの字訛として本来は今日 *ḥ* が表す音（有声歯茎硬口蓋破擦音）を持っていたが、このオリジナル版のテキストでは文字 *h* が音 *h*（無声歯茎硬口蓋破擦音）と音 *ḥ* の両方を表し得る。文字 *h* が音 *h* のみに対応するようになったのは、後に文字 *ḥ* の形が *h* から発明されてからのことである。

このように、文字 *ḥ* が18世紀のテキストに既に出現していることと、元々はグラゴール文字 **М** を起源に持つ有声音だったことを確認した。その上で、次にムルカリが分析した文字の「過負荷」の問題と、彼が提唱した表記法について考察する。

#### 4. サヴァ・ムルカリによる正書法

ここではムルカリの代表的著作『厚いイェルの脂肪もしくは文字の選別』（1810年）で提案された表記システムを取り上げ、その表記システムの基盤となった理論を分析する。その中でも特にムルカリのアルファベットに併存する不完全さと論理的整合性

に着目し、その評価を行うことを目的とする。

#### 4.1. 『厚いイエルの脂肪』における教会文字の整理

今までに見てきたように、18世紀終盤から19世紀初頭のセルビアでは、ロシア教会スラヴ語とスラヴ化されたロシア語にかわり、民衆にも理解できるセルビア民衆語の文学に対する志向が強まりつつあった。テキストには18世紀前半に導入されたロシア教会スラヴ語の文字が用いられ、18世紀後半になると世俗文字も使用されるようになった。1760年代のオルフェリンによる詩を筆頭に、セルビア文学において民衆語の作品が見られるようになったが、民衆語を表記する方法はまだ整備されていなかった。

そんな中、ムルカリは1810年にブダで18ページからなる『厚いイエルの脂肪もしくは文字の選別』を出版した。この論文によってムルカリはセルビア人が教会の文字や世俗文字とは別の、セルビア語固有の文字を持つことを主張し、セルビア民衆語の音韻を基盤にロシアの教会文字を改革した。

「話すように書く」という方針のもと、一音一字対応の原則を採用したムルカリは、教会スラヴ語のアルファベットに対し、どれが余計な文字、すなわち独自の音価を持たない文字で、どれが必要な文字か分析を行った。それにしたがって unnecessary な文字を除外し、とりわけ文字 ѣ の必要性を主張した。その上でムルカリは改革されたキリル文字の最終的な展望を示した。

ムルカリが「我々のアルファベット」として挙げたロシア教会スラヴ語で用いられるキリル文字は、以下の42文字だった。

а, б, в, г, д, е, ж, з, з, и, і, к, л, м, н, о, п, р, с, т, оу, у, ф, х, ѿ, ц, ч, ш, щ, ѣ, ы, ь, ѣ, е, ю, ѡ, Ѡ, ѡ, ѡ, Ѣ, Ѥ, Ѧ, Ѩ, Ѭ, Ѯ, Ѱ, Ѳ, Ѵ.

分析対象となるこれらの42文字の選択について、少々の説明を加えよう。カラジッチは1818年の『セルビア語辞典』の前書きにあたる部分のうち、「セルビア語文法」という項目でスラヴ語の、すなわち「我々の教会の」アルファベットとして45文字を挙げている。

а, б, в, г, д, е, ж, з, з, и, і, к, л, м, н, о, п, р, с, т, оу, у, ф, х, ѿ, ц, ч, ш, щ, ѣ, ы, ь, ѣ, е, ю, ѡ, Ѡ, ѡ, ѡ, Ѣ, Ѥ, Ѧ, Ѩ, Ѭ, Ѯ, Ѱ, Ѳ, Ѵ.

これらをムルカリが挙げた「我々のアルファベット」と比較すると、文字 і が і の形になっている他、з, ѡ, ѡ の3文字が追加されている。追加された3文字についての解説を見ると、з は「з の別の形に他ならない」<sup>48</sup>、ѡ (ユス) は「今日スラヴ語でもどこにも用いられていない」<sup>49</sup>と説明されており、ѡ は w とひとまとめに「我々やロシア人たちは o として発音する」<sup>50</sup>と述べられている。したがってムルカリが挙げた42文字はある程度一般的な選択だったと考えることができる。

ムルカリはそれら教会スラヴ語の文字を、セルビア人にとって必要か不必要か判断する準備段階として以下の5つのグループに分類した。

1. 単音の文字：一つの記号が一つだけ音素を示す。

а, б, в, г, д, е, ж, ѕ, з, и, њ, к, л, м, н, о, п, р, с, т, оу, у, ф, х, ц, ч, ш, ы, є, w, v.

2. 多音の文字：一つの記号が複数の音素を持つ（複数の音素が一つの記号で表される）。

е (ie), ѿ (от), ш (шт), ѣ (ie), є (ie), ю (iy), Ѧ (ia), ѧ (ia), ѧ (кc), ѧ (тх).

3. 不安定な（発音が変わり得る）文字：一つの記号が異なる音価を持ち得る。

д, е, є, и, њ, v, л, н, т.

4. 交換可能な文字：一つの音素または連続が異なる方法で記される。

е, є と ѣ ; ѕ と з ; о と w ; Оу と у ; и, њ, ы と ѧ ; ѧ と Ѧ.

5. 複合的な文字：一つの音素が複数の記号によって記される。

дъ, лъ, нь, ть, ѣ, および ѣ とのあらゆる組み合わせ

複数の項目に入っている文字があるのは、環境次第で音が変わり得るためである。例えば、単語 *предпоставити* において文字 *д* は無声化し *т* となるが、文字 *д* そのものが音 *т* を表すわけではない。また、文字 *е* が3つのグループに入っているのは、この文字が音 *e* を持つとき単音文字 (1)、音 *ie* を表すとき多音文字 (2) であり、したがって異なる音価を持つ不安定な文字 (3) になるからである。

ムルカリによれば、この5つのグループ単位では、単音文字 (1) はアルファベットの中に必要であり、交換可能な文字 (4) の中から一つの記号が選択されなければならない。そして多音文字 (2)・不安定な文字 (3)・複合文字 (5)、すなわち一音と一文字が対応していない状態は、そのアルファベットにとって有害である。また発音のない文字 *ѣ* は不必要である。

#### 4.2. ムルカリのアルファベット

次にムルカリは、これらの分類された文字を選別していった。基本的な方針は、小音 (гласчић) と文字素 (графема) を一つずつ対応させることだった。文字素はそれ以上分断できない弁別的な表記単位である。それら文字素の使用は正書法によって規定されるべきだとムルカリは考えており、その規定をムルカリは以下のように決定した。

単音文字 (1) のうち、交換可能な文字 (4) に入っていない文字はアルファベットに残す。すなわち、文字 *а, б, в, г, д, ж, к, л, м, н, п, р, с, т, ц, ч, ш* は必要不可欠である。

多音文字 (2) のうち、*ѿ, ш, ѣ, є, ю, Ѧ, ѧ, ѧ, ѧ* を排除する。文字 *е* は必要だが、交換可能な音や多音としては機能すべきでない。

不安定な（発音が変わり得る）文字 (3) のうちアルファベットから排除しない文



字については、音と記号の対応を人為的に安定させる。文字  $\text{и}$  は音素  $\text{и}$  のみを表し、半母音にはならない文字とする。半母音は  $\text{ї}$  で表す。

交換可能な文字 (4) はどれか一つのみを残す、または全て取り除く。文字  $\text{з}$  は必要だが、 $\text{s}$  は  $\text{з}$  に統合される<sup>51</sup>。母音  $\text{y}$  について、文字  $\text{Oy}$  と  $\text{y}$  は交換可能だが、文字  $\text{y}$  のみを保持する。文字  $\text{o}$  を保持し、 $\text{w}$  を取り除く。

複合文字 (5) のうち、 $\text{ѣ}$  および文字  $\text{ѣ}$  とのあらゆる組み合わせを排除する。

ムルカリはこのように unnecessary な文字を除外した結果、「信用できる、完全に疑問の余地のない 25 文字に辿り着いた」<sup>52</sup>。そのアルファベットは以下の通りである。

$\text{а, б, в, г, д, е, ж, з, и, ї, к, л, м, н, о, п, р, с, т, у, ф, х, ц, ч, ш, ъ}$ 。(26 文字)

「交換可能な文字」のグループに  $\text{и, ы, ѣ}$  と共に挙げられた  $\text{ї}$  は、 $\text{и}$  とは差別化され半母音として入れられた。さらにこのリストには、外来語に使用される  $\text{ф}$  と、当時農村のセルビア人が知らず、「より洗練された人々」のみが発音していた  $\text{x}$  をも含んでいる。

また、ムルカリは厚いイェルを「とりわけ不必要」だと断定したが、薄いイェル ( $\text{ь}$ ) を維持し、単語のあらゆる位置で二重字  $\text{дь, ль, нь, ть}$  を用いる表記法を考案した。これはエマヌイル・ヤンコヴィッチが厚いイェルと薄いイェルの両方を否定したことと対照的である<sup>53</sup>。

このように、ムルカリが提唱した表記法は、26 文字を用いて 29 の音素を表記するシステムになっていた。現代セルビア語の正書法と比較すると、 $\text{п}$  (有声後部歯茎破擦音) にあたる文字が含まれていないことがわかる。これについては議論が行われているが、推測の域を出ない。この文字がラチャニンの『初等教育読本』(1717 年)で使用されていたことを前に確認したように、彼の時代のセルビア語のテキストで既に文字  $\text{п}$  は見られるし、ムルカリ自身も音素  $\text{п}$  の存在を知らなかったわけではない。『厚いイェルの脂肪』の 8 頁で文字の組み合わせ  $\text{гь}$  によって記されている音が音素  $\text{п}$  にあたるとオクカが指摘している<sup>54</sup>。あるいは、イヴィッチの推測によれば、ムルカリにとって  $\text{п}$  という音は文字の組み合わせ、すなわち  $\text{дж}$  によって表し得るものだった<sup>55</sup>。

しかし、文字の組み合わせ  $\text{гь}$  にせよ  $\text{дж}$  にせよ、これらの表記はムルカリ自身が分類するところの複合文字 (5) にあたる。一文字が一音に対応するという原則に反するにもかかわらず、ムルカリがその音素を二重字によって記す手法に完全に満足したとは思えない。この点について、オクカはムルカリがこの音の存在を「忘れていた」<sup>56</sup> 可能性にさえ言及している。というのも、『厚いイェルの脂肪』においてムルカリはそもそも教会のキリル文字を基盤に議論を進めている。したがって最初に挙げられた 42 文字のリストに含まれていない  $\text{п}$  が話題に上らなかったのもさほど奇妙なことではなかった。

ムルカリの表記システムの不完全さは、無論4つの二重字（現代の正書法における ѣ, њ, њь, ѣ）にも見て取れる。複合的な文字は有害だと考えていたにもかかわらずこれらの二重字が残されたのは、文字 ѣ が18世紀のテキストに使用されていたことを考えると一見奇妙である。文字 ѣ によって ѣь を差し替えた場合、文字 њ を用いた二重字の一つが解消されるからである。しかし仮にその差し替えを行った場合、他3つの њ による二重字が依然として残されたままになり、表記システムの論理的な整合性に傷がつくことになっただろう。ゆえに文字 ѣ を導入しなかったことは合理的な判断なのである。

また、『オブラドヴィッチの人生と冒険』の1783年版と1833年版の比較で見たように、1818年にカラジッチが文字 ѣ を導入する以前の文字 ѣ は、現代の正書法における ѣ と ѣ の機能を併せ持っていた。したがって文字 ѣ はムルカリによる分類上、発音が変わり得る不安定な文字(3)にあたりと筆者は考える。よって、もしムルカリが文字 ѣ を表記システムに組み込んでいた場合、文字 њ による二重字のシンメトリーを崩すだけでなく、また別の「有害な」文字を持ち込むことになり、二重の意味で表記システムの整合性が損なわれていただろう。したがってムルカリのアルファベットは表記システムとしては不完全だが、論理的な整合性を保っていたと評価できる。

## 5. ムルカリの表記システムからカラジッチの正書法へ

イェルネイ・コピタルは『厚いイェルの脂肪』に対し、「この18ページにどんなに分厚い文法書よりも多くの言語的哲学がある」と書き、高く評価した<sup>57</sup>。ルカ・ミロヴァノヴ<sup>58</sup>はこの正書法を用いて『続く記述』(1810年)を執筆した。しかしオクカによると、ミロヴァノヴは彼自身が考案した、文字 ѣ を含む30文字のアルファベットによる表記法を使用していた。つまりミロヴァノヴ自身が、ムルカリと同時期に文字 њ による二重字 ѣь, ѣь, ѣь, ѣь を含む独自の表記法を考案していた<sup>59</sup>。

ヨーロッパ文化における「新しい文字を作り出してはならない」というルール<sup>60</sup>に反するものだったこと、またセルビアの教会がこの正書法に対して批判的だったことから、スラヴ・セルビア語の作家による評価はまちまちだった。正教会からの批判は、前述のようにその後のムルカリの人生にかなり影を落とした。ステファン・ストラティミロヴィッチに代表される指導層は、ロシアとの関係を損なう危惧から文字 ѣ、すなわちロシア語における硬音記号の排除を批判したのである。ロシアはヴォイヴォディナの正教会の保護者として考えられており、ロシア教会スラヴ語との明白な繋がりを示す文字 ѣ は親ロシア的な聖職者たちに尊ばれていた。

『厚いイェルの脂肪』のセルビア標準語史上の位置づけとして、オクカは「ムルカリが改革した近代的なアルファベットから我々の今日のキリル文字まで、その比較的小さい距離を乗り越えるのはカラジッチにとって難しくなかった」<sup>61</sup>と述べている。

カラジッチは『セルビア語辞典』（1818年）の「セルビア語文法」でセルビア語に「28の単純な音がある」と述べ、それらの音を表す文字を挙げている。

a, б, в, г, д, ѣ, е, ж, з, и, j, к, л, љ, м, н, њ, о, п, р, с, т, ѣ, у, ц, ч, ш.

このアルファベットに外来語に使用される  $\phi$  と、当時の農村部ではあまり知られていなかった音を表す  $x$  を足すと、現代セルビア語のアルファベットが完成される。

カラジッチのアルファベットを見るに、カラジッチはムルカリによる表記システムの不完全な面を補完し、 $\dot{h}$ ,  $\dot{y}$ ,  $\dot{z}$ ,  $\dot{h}$  の表記法を考案したと言えるだろう。ただしそれは結果論にすぎないとも考えることもできる。なぜならカラジッチは自身の表記システムにおいて、変更や差し戻しを繰り返しているからである。『スラヴ・セルビア民謡抄』（1814年）では基本的にムルカリのアルファベットを引き継ぎつつも、そこへ  $\epsilon$ ,  $\gamma$ ,  $\iota$  を加えている<sup>62</sup>。また同年の『セルビア語文法』でそれらを放棄して  $\dot{i}\epsilon$ ,  $\dot{i}\alpha$ ,  $\dot{i}y$  とした。文字  $\dot{i}$  を半母音として用いるという点では、これらの二重字はムルカリの表記システムに則っている。1815年には『セルビア民謡抄第二集』で文字  $\gamma$ ,  $\iota$ ,  $\dot{y}$ ,  $\theta$ ,  $\dot{h}$  を戻している。結果的に『セルビア語辞典』（1818年）で、ムルカリが残した課題を片付けたとはいえ、それはカラジッチなりの試行錯誤に基づいたものでもあった。

また、ムルカリとカラジッチの1818年のアルファベットを比較すると、相違点は二重字  $\dot{d}y$ ,  $\dot{y}$ ,  $\dot{z}$ ,  $\dot{h}$  の単字への変更 ( $\dot{h}$ ,  $\dot{y}$ ,  $\dot{z}$ ,  $\dot{h}$ ) だけではないことがわかる。文字  $\dot{u}$  が導入されている上に、文字  $\dot{i}$  から  $j$  への変更も行われている。後者に関しては、元来母音を表す記号  $\dot{i}$  で子音  $j$  (硬口蓋接近音) を表記するべきではないとカラジッチが考えたために、ムルカリの表記システムに対して加えられた修正だと言ってよいだろう。しかし前者の導入は、ムルカリが『厚いイェルの脂肪』で行った分析とは無関係の思考がインスピレーションになったと思われる。

ムルカリの表記法において、オクカは新たな文字を追加せずに既存の文字を利用している点についても評価している<sup>63</sup>。新たな文字がなかったため当時の印刷所は活字を開発する必要がなかった。つまり後年カラジッチが開発する、いくつかの新たな文字を含む正書法に比べ利用しやすかったという評価である。

16世紀のオスマン帝国領内の印刷所では、修道士たちがしばしば必要に迫られて活字を自ら用意していた<sup>64</sup>。よって文字を彫る作業自体は、手作業でまかなえる範囲ではあった。しかし18世紀には、修道士が手作業ですり減った活字を補いながら作るようなことはもはやなくなっていた。活字の製作は専門の職人によって行われ、活字の交易市場も確立していた。後にカラジッチが発明した文字のために、コピタルが雇用した職人によって新たに活字の鑄造が行われたことを考えると、独自の文字の発明は印刷技術上の困難を伴うことではなかったはずである。これはある面では、前述したロクサンディチの指摘のように、カラジッチに比べムルカリの後ろ盾が弱かったことに関係するだろう。しかしそれ以上に、文字の発明によって教会の文字から完全

に逸脱することが、ムルカリが実際に経験したよりもさらに激しい正教会からの攻撃を招くことも予想された<sup>65</sup>。

ムルカリには自身の表記法が不完全だという自覚があり、「完全ではないが、以前のアルファベットの不完全さと比べれば大きな問題ではない」と述べている<sup>66</sup>。ムルカリは教会の文字の「底荷」を軽くし、文字のリストを最大限軽くしたが、リスト内の文字だけで解決できない問題は保留していた。ムルカリが『厚いイエルの脂肪』で提唱したアルファベットは、現代の正書法に距離としては肉薄していたものの、そこから「底荷」を完全に取り除くにはある種の飛躍が必要とされていた。彼自身が掲げた原則を守るなら、新たな文字を創造せずに表記システムを構築するのは困難だったからである。したがってムルカリによる表記法は本質的に過渡的なシステムだったと筆者は考える。現代セルビア語の正書法を一つの完成形とするなら、ムルカリはそれに限りなく近づいたと言えるだろう。だが実際にそれが完成形に至るには、カラジッチが行ったような仕上げが必要とされていた。

## 6. 結論

本論文は、サヴァ・ムルカリが提唱した表記システムと、カラジッチが定めた正書法との繋がりについて考察することを目的としていた。そのためにムルカリ以前のキリル文字の種類とその表記法を確認した上で、『厚いイエルの脂肪』について考察した結果、ムルカリは現代セルビア語の正書法に限りなく近づいたが、完全な表記システムに到達するにはカラジッチによる文字の創造という飛躍が必要だったと考えた。

また、19世紀初頭の時点で広く知られており、印刷所にも活字が存在した文字 *h* をムルカリが自身の表記法に組み入れなかった理由として、二重字を一つ減らすことで生じる非整合性の回避を挙げるオクカの説に筆者は賛同した。その上で、文字 *h* が整合性を損なうものだと見なされた理由は他の3つの二重字 *дѣ*, *лѣ*, *нѣ* との兼ね合いだけでなく、当時音 *h* と *h̑* を表し得る不安定な文字だったことにもあるという結論に達した。

セルビアの印刷の中心地は長らく国外に置かれており、18世紀の末でさえ、最大の出版中心地はペシュトにあった。カラジッチの標準語運動の拠点がウィーンであったことも、民族運動史において特異な点だとされている<sup>67</sup>。ただしロクサンディチが「18世紀から19世紀初めは、セルビア社会のすべての層がいつも動いていた。その社会的なダイナミクスがなければ、セルビアの民族統合もありえなかっただろう」<sup>68</sup>と述べているように、この時代のセルビア知識人たちは絶え間なく移動していた。オルフェリンはヴェネツィアやティミショアラで活動し、オブラドヴィッチはヨーロッパ各地を旅して回った。第一次セルビア蜂起の失敗により難民としてウィーンに渡ったカラジッチはしばしばフォークロア採集等の目的でセルビアへ立ち戻っていたし、

不遇と言ってよい晩年を送ったムルカリにしても、その放浪自体はこの時代においてさほど悲劇的なことでもなかった。

今回の論文ではカラジッチとムルカリの正書法上の関連を中心に据えるあまり、そういった社会全体のダイナミズムや、セルビア知識人のネットワーク状の空間ではなく、ムルカリのアルファベットからカラジッチのアルファベットへの一直線の道筋を描いてしまったようなきらいがある。現代セルビア語の正書法とムルカリによる表記システムを比較した場合、後者から前者に辿り着く解答を見出すのは易しい。しかし当時のムルカリやカラジッチの立場からは、そのような終着点が見えていたわけではなかった。彼らの表記法が、一字一音対応の原則や言語学的な考慮に基づき、試行錯誤を重ねながら作り上げられたものであったことを最後に強調しておきたい。

#### 【参考文献】

- 栗原成郎「セルビア民謡「ハサン・アガの妻の哀歌」について」『比較文学研究』22号、東大比較文学会、1972年9月、48-62頁。
- 小林潔「スラヴの文字と文化」早稲田大学国際言語文化研究所『ロシア・中欧・バルカン世界のことばと文化』成文堂、2010年、38-56頁。
- ドラーゴ・ロクサンディチ(越村勲訳)『クロアチア＝セルビア社会史断章』彩流社、1999年。
- カラチヒ V. Српски рјечник (1818) Сабрана дела Вука Караџића 2. Београд, 1966.
- ミランオヴィチ A. Кратка историја српског књижевног језика. Београд, 2004.
- オジュカ M. “Сало дебелого јералибо азбукопротрес” Саве Мркаља у старом и новом руху. Загреб, 2010.

#### 【註】

- <sup>1</sup> Johann Christoph Adelung (1732-1806) ドイツの文法・文献学者。主著は『高地ドイツ方言の文法的・批判的な完全版辞典の試み』(1774-1786年)、『プロイセン王国の学校のためのドイツ語文法』(1781年)等。また正書法に関する作品に『発音、正書法、語形変化、派生についての小辞典付きドイツ語正書法詳説』(1788年)があり、「書いてあるように読め(Schreibe, wie du sprichst)」という原則はセルビア語の改革者ヴーク・カラジッチにも影響を与えた。
- <sup>2</sup> Вук Стефановић Караџић (1787-1864) セルビアの言語学者・文学者・民俗学者。シュト方言イエ下位方言を標準文語に定め、現代セルビア標準語の基礎を築いた人物として知られる。
- <sup>3</sup> カラジッチは『セルビア語辞典』(1818年)でセルビア語のラテン文字のリストを作成した。リュエデヴィト・ガイは1830年代にカラジッチのキリル文字と一対一で対応したラテン文字アルファベット(Gajevica)を整備し、ダニチッチが修正を加えた。

<sup>4</sup> 軍政国境地帯はオスマン帝国の侵入に備えて作られた対イスラーム防衛線であり、その起源は16世紀に遡る。マリア・テレジア時代に確立され、アドリア海からサヴァ川沿いにバナト地方へ、スラヴォニア、クロアチアとダルマチアをお互いから分断する形で広がっていた。この地帯ではオーストリア政府による推進もあり、17世紀から18世紀にかけてオスマン帝国領からセルビア人の入植が行われていた。

<sup>5</sup> ロシア教会スラヴ語、ラテン語、ドイツ語、フランス語をマスターし、ギリシャ語、ヘブライ語、イタリア語、ハンガリー語の知識があった。

<sup>6</sup> Јован Мушкатировић (1743-1809) ヴォイヴォディナ地方センタ出身のセルビア人作家。

<sup>7</sup> Сава Текелија (1761-1842) ハプスブルク帝国領アラド (現ルーマニア領) 出身の法学博士。

<sup>8</sup> Лукијан Мушички (1777-1837) セルビアの詩人。シシャトヴァツ修道院の掌院 (正教会の修道司祭の一階級) で、カラジッチの主要な協力者の一人だった。

<sup>9</sup> Стеван Стратимировић (1757-1836) カロロヴツィの府主教(1790-1836)。オブラドヴィッチ、ムルカリやカラジッチの言語改革に反対の姿勢を取っていたが、キリル文字の改革自体は支持していた。

<sup>10</sup> Георгије Хранислав バチュカ主教管区の主教 (1839-1843)。

<sup>11</sup> Јосиф Путник スラヴォンスカ主教管区の主教 (1808-1828)。

<sup>12</sup> Иван Савић Југовић (1772-1813) ヴェリカ・シュコーラの教授。ヴォイヴォディナ地方ゾンボル出身。

<sup>13</sup> ロクサンディチ『クロアチア=セルビア社会史断章』112頁。

<sup>14</sup> ロクサンディチ『クロアチア=セルビア社会史断章』109頁。

<sup>15</sup> Jernej Kopitar (1780-1844) スロヴェニアの詩人・スラヴ文献学者。ゴレンスカ地方のレブニェで生まれ、リュブリャナで教育を受けた。ウィーンでオーストリア政府のギリシア語・スラヴ語書物の検閲官を務め、翻訳にも従事した。ヴーク・カラジッチの標準セルビア文語形成における主要な協力者の一人として知られる。

<sup>16</sup> ロクサンディチ、『クロアチア=セルビア社会史断章』113-114頁。

<sup>17</sup> Окука М. “Сало дебелога јера либоазбукопрогрес” Саве Мркаља у старом и новом руху. С. 17.

<sup>18</sup> 教会統一派だったダルマチア主教クラリエヴィッチは、府主教ストラティミロヴィッチから不遇の環境に置かれていたムルカリが統一派支持に回るだろうと考え、彼を招聘した。しかし結果的にムルカリは統一に反対し、後にシベニクを去った。

<sup>19</sup> 小林潔「スラヴの文字と文化」41頁。

<sup>20</sup> 使徒書簡と使徒行伝を典礼用抜粋したものを指す。

<sup>21</sup> ボヘミアやクロアチアでも使用された。

<sup>22</sup> 木村彰一『古代教会スラヴ語入門』白水社、1985年、33頁。

メトディオスの没後に彼の弟子の多くは国外追放されブルガリアに渡った。古代教会スラヴ語はそれらの弟子、とりわけ後にブルガリア主教となったクリメントを中心とするオフリド (現マケドニア領) 派や、プレスラフ (現ブルガリア領) 派の活動によってスラヴ世界に広がっていった。プレスラフのコンスタンティン (Константин Преславски) は9世紀から10世紀頃活躍した後者の中心人物である。

<sup>23</sup> 小林潔「スラヴの文字と文化」41頁。

<sup>24</sup> Милановић А. Кратка историја српског књижевног језика. С. 27.

<sup>25</sup> 本論文ではキリル文字を例示する際に便宜上現代的な書体を用いている。歴史的なキリル文字の書体では、例えば ѿ は概ね **А**、щ は **Ш** であり、т はテキストによって **т** のような書体になる。また е は多くの場合文字 e やギリシア文字 ε に近い外見を持つ。☞**εε** のように小文字の配置を 3 段に分けると、前者の文字 e にあたる「e」は中央の段に収まり、後者の文字 ε は中央と下の 2 段を使う。しかしここでは文字 e と ε として識別する。

<sup>26</sup> ギリシア語の発音では ε の長母音を表す。

<sup>27</sup> ギリシア語の発音上は /ju/ である。

<sup>28</sup> Милановић А. Кратка историја српског књижевног језика. С. 39.

<sup>29</sup> Окука. “Сало” Саве Мркаља. С. 67-68.

<sup>30</sup> Окука. “Сало” Саве Мркаља. С. 68.

<sup>31</sup> Милановић. Кратка историја српског књижевног језика. С. 84.

<sup>32</sup> Кипријан Рачанин Байна・バシユタ（現在のセルビア・ズラティボル郡）のラチャ修道院からブダ付近のセンチンドレ（センチンドレヤ）に移住し、宗教的書物の写本を活発に行っていた。

<sup>33</sup> Гаврил(о) Стефановић Венцловић (1670-1749) セルビア人聖職者。ラチャニンの最も有名な協力者。

<sup>34</sup> Josef Kurzbeck (Kurböck) (1736-1792) ウィーン印刷業者。アムステルダム出版業者ヨーゼフ・プロープス (-1786) の書体を用いてヘブライ語での出版を行ったことでも知られている。

*Encyclopaedia Judaica*, vol. 16 (Macmillan, 1971) p. 131.

<sup>35</sup> Максим Терентьевич Суворов ペテルブルクの主教会議の翻訳者、教育者。府主教モイシイェ・ペトロヴィッチの要請によって、1725年に教師としてペテルブルクからカルロヴツィへ派遣された。

<sup>36</sup> Эммануил Козачинский 1733年にキエフ・アカデミーからカルロヴツィへ派遣された6名の教師集団のリーダー。

<sup>37</sup> Орфелин З. Искусни подрумар. [http://scc.digital.nb.rs/document/S-II-0892] (2011年12月12日閲覧)。

<sup>38</sup> Јован Рајић (1726-1801) カルロヴツィ出身のセルビア人聖職者。

<sup>39</sup> Рајић Ј. Катихизис малили сокраштено православно исповеданије. [http://scc.digital.nb.rs/document/S-I-0206] (2011年12月12日閲覧)。

<sup>40</sup> Рајић Ј. Бој змаја са орлови. [http://scc.digital.nb.rs/document/S-I-0751] (2011年12月12日閲覧)。

<sup>41</sup> Доситеј Обрадовић (1744?-1811) セルビア文語に口語を導入した18世紀セルビア文学の中心人物。バナト地方のチャコヴォ（現ルーマニア領、当時はハンガリー領）に生まれ、ノヴォ・ホポヴォ修道院やヒランダル修道院の僧となった。

<sup>42</sup> Обрадовић Д. Љубезни Харалампие [http://scc.digital.nb.rs/document/S-II-3678] (2011年12月12日閲覧)。

<sup>43</sup> Милановић. Кратка историја српског књижевног језика. С. 81.

<sup>44</sup> Обрадовић Д. Живот и прикљученија Димитрија Обрадовића нареченога у калуђерству Доситеја њим истим списати издат. [http://scc.digital.nb.rs/document/S-II-0832] (2011年12月12日閲覧)。

- <sup>45</sup> *Обрадовић Д.* Дела ДоситејаОбрадовића. Част 1, Живот и прикљученија. [http://scc.digital.nb.rs/document/S-II-0840a] (2011 年 12 月 12 日閲覧).
- <sup>46</sup> *Обрадовић Д.* Дела ДоситејаОбрадовића (1833). С. 8.
- <sup>47</sup> *Обрадовић Д.* Дела ДоситејаОбрадовића (1783). С. 8.
- <sup>48</sup> *КараџићВ.* Српски рјечник (1818). С. XXXIII.
- <sup>49</sup> *КараџићВ.* Српски рјечник (1818). С. XXXV.
- <sup>50</sup> *КараџићВ.* Српски рјечник (1818). С. XXXV.
- <sup>51</sup> 文字 *з* が有声歯茎摩擦音 /z/ を表す一方、*s* は元来有声歯茎破擦音 /dz/ として発音されたが、既に発音の区別は曖昧になっていた。
- <sup>52</sup> *Окука.* “Сало” Саве Мркаља. С. 79.
- <sup>53</sup> ただしヤンコヴィッチは文字 *ь* のかわりにアポストロフィを使用した。
- <sup>54</sup> *Окука.* “Сало” Саве Мркаља. С. 82.
- <sup>55</sup> *Окука.* “Сало” Саве Мркаља. С. 82.
- <sup>56</sup> *Окука.* “Сало” Саве Мркаља. С. 87.
- <sup>57</sup> *Милановић.* Кратка историја. С. 101.
- <sup>58</sup> Лука Милованов Георгијевић (1784-1828) ボスニア・スレブレニツァ生まれのセルビア人作家。カラジッチの文法書や辞書の制作に対し様々な助言を行った。
- <sup>59</sup> *Окука.* “Сало” Саве Мркаља. С. 83.
- <sup>60</sup> *Милановић.* Краткаисторија. С. 101.
- ラテン文字においては、既存の文字を組み合わせるか、アクセント記号を追加するか、主にどちらかの方法で正書法の開発が行われた（例：音 /sh/ に対し、英語のアルファベットでは sh、フランス語で ch、ドイツ語で sch、チェコ語・スロヴェニア語・クロアチア語などでは š が用いられる）。
- <sup>61</sup> *Окука.* “Сало” Саве Мркаља. С. 73.
- <sup>62</sup> *Милановић.* Кратка историја. С. 117.
- <sup>63</sup> *Окука.* “Сало” Саве Мркаља. С. 84.
- <sup>64</sup> リュシアン・フェーヴル、アンリ＝ジャン・マルタン（関根素子、長谷川輝夫、宮下志朗、月村辰雄訳）『書物の出現（下）』筑摩書房、1985 年、57 頁。
- <sup>65</sup> *Окука.* “Сало” Саве Мркаља. С. 86.
- <sup>66</sup> *Окука.* “Сало” Саве Мркаља. С. 137.
- <sup>67</sup> 栗原成郎「セルビア民謡『ハサン・アガの妻の哀歌』について」53 頁。
- <sup>68</sup> ロクサンディチ『クロアチア＝セルビア社会史断章』110 頁。



## **Digraphs in the Orthography of Sava Mrkalj**

**Shuko, NISHIHARA**

Sava Mrkalj is known for his role in standardization of Serbian language, as he proposed new Cyrillic writing system in his work “Salo debeloga jera libo azbukoprotres” (1810). Compared to the system established by Vuk Karadžić, Mrkalj’s is imperfect and transitional, as Mrkalj’s alphabet retains four digraphs (дѣ, лѣ, нѣ and тѣ) against the phonemic principle of his reform. This paper aims to discuss how Mrkalj’s alphabet keeps consistency reflecting his order of priority.

Keywords: Serbian language, Cyrillic letters, language standardization, orthographic reform